

## 2.1.1 WG1国内分科会の概要

WG1 システム機能構成

Architecture

### 担当領域

WG1では、さまざまなITSシステム間の相互運用性の向上に資する共通基盤となる規格の整備を進めている。これまでに、用語共通化のための標準語彙、各国・各分野のシステムアーキテクチャ相互の対応を容易にするための参照アーキテクチャ、およびデータの共有化を促進するためのデータ辞書・データレジストリの要件についての規格を制定したほか、UML、XML、CORBA等の記述言語やWeb ServiceのITSにおける利用方法についての標準化、個人情報の保護、およびITS展開導入計画作成、システム要件の記述法等のシステムアーキテクチャ実務活用に係る活動等を進めている。

### 活動状況

- ・2009年9月の前コンビーナ辞任以降、活動の空白期間が続いていたが、2010年4月のTC204ニューオリンズ総会において新コンビーナとしてRichard Bossom氏が承認された。2010年8月、ロンドンで国際会議が開催され、約1年ぶりにWG1の活動が再開された。
- ・各種規格記述言語のITS規格における利用法の標準化を推進している。XML、CORBA、UML等のITSにおける利用法に関する規格をISOないしはTRとして発行につなげている。
- ・日本がプロジェクトリーダを務める「Web Serviceの利用法」は、Part1（ITSウェブサービスの実現）を2009年9月にISO発行、さらにPart2（ITSウェブサービスの展開）を検討中である。
- ・欧州委員会の標準化命令M/453に対応した標準化項目にどう対応するかが課題となっている。

各国の取組と考え方	<ul style="list-style-type: none"><li>・近年活動が低調であった米国は、ISO24531（ITSの規格等におけるXMLの利用）改訂に関連して、OASIS標準のUBL（Universal Business Language）との整合を主張、活動が活発化してきている。</li><li>・欧州は、システムアーキテクチャ等の基盤を重視している。次回プラハ会議以降、M/453への対応を巡り活動が活発化すると見られる。</li><li>・アジアからは、韓国の専門家が定常的に国際会議に参加。シンガポールやタイ、マレーシアなど、アジア諸国の関心も向上している。</li></ul>
問題点	<ul style="list-style-type: none"><li>・近年ITSに関わる各国予算の削減などによって定常的な会議参加者を確保することが困難となってきているが、M/453に対応して標準化を加速していくためにはエキスパートの補充など体制の確立が急務であるとともに、他WGとの連携が課題である。</li><li>・これまでの日本の貢献はWG1内で十分に認知されており今後の標準化審議への貢献も期待されているが、増加するすべての標準化項目に対してリソースを割くことは困難な状況である。</li></ul>
今後の対応	<ul style="list-style-type: none"><li>・アジア諸国との連携も考慮しながら日本として重点をおくべき作業項目を吟味し、関係WG国内分科会との連携を踏まえて国際会議に臨むことにより、成果につなげてゆく。</li></ul>